●巻頭言

国を診る小児科医

日本小児科医会 会長
内藤壽七郎

わが国の子ども人口の全人口に対する比率が，ついに20%を割り込んで19%になったと報じられた。25%を占めていると思っていたのも束の間のうちに過ぎ去っていった感が強い。さらに昨年の出生率は10.1%で，わが国としてもまた国際的比較のうえでも最低であるといわれている。

現時点の日本は，物資は豊かで，資金もありあまっているのか，あのアメリカに対してさえ債権国となっている。この原因のひとつには、過去において多くの子女を産み，育てたからであり，その人々がやる気旺盛な人間に成長したからに他ならない。しかもそのためには体が健やかでなければ，やる気は出てこないことはいうまでもない。

日本小児科医会の発会披露宴では，歴代４人の厚生大臣の出席があったことは記憶に新しい。そしてその方々の前で私は小児科医が抱える問題のひとつをとりあげ，次のような挨拶を申し上げた。

「昨今の医療事情に鑑み，老人問題に目を奪われてしまうと，老人の唯一の寄りどころである年金を稼ぎ出す若者の数が減少し，現在５人で１人の老人の年金を支えているが，やがて３人で１人と加重されよう。そのためには心身ともに健康な人間を育て上げる必要があり，その一翼を担う小児科医に対して国家や社会は相応の負担を払うべきである。もしもそれができないなら，小児科医は減少の一途を辿り，やがては暁の星のごとくなり，十分な小児医療は不可能となるであろう。成人病の源は早くも乳幼児期に宿るのである。体も心も弱々しい者が国民の多くを占めれば，国は衰える。小児科医を大事にしない国は滅亡する」。

今にして思えば，的確な指摘であったと自負する。今こそ出生増加の方策を確立しないと経済大国は文字どおり槿花一朝の夢となろう。その基本となる唯一のことは既婚の若い女性に育児は楽しいものであることを十分に味わわせ，一人っ子の陥りやすい欠点を知らせ，二人であっても上は総領の甚六，下は末っ子の甘えん坊となりやすく，三人の子持ちでもってはじめてバランスのとれた人となることができることなどをよくわかってもらうよう努力するべきではなかろうか。